

フランス革命・ナポレオン期のサヴォワとジュネーヴ

上 垣 豊

はじめに

1860年、サヴォワ（Savoie）はフランスに併合された。ナポレオン3世は、イタリア統一事業に援助する見返りに、サルデーニャ王国からサヴォワとニースを獲得したのである。2010年はサヴォワ・ニース併合150周年にあたり、サヴォワではいくつもの講演会、記念行事が組織された。サヴォワの歴史は近代における国境を考える上では格好の歴史の素材であるが、とくにサヴォワとジュネーヴの関係は複雑である。ジュネーヴはかつてはサヴォワ公国の一部であり、宗教改革によってサヴォワから分離独立した後も、両者の経済的結びつきは深く、今でも北サヴォワ、すなわちオート＝サヴォワ（Haute-Savoie）県の少なくない部分がジュネーヴの経済圏である。北サヴォワの自由貿易ゾーンの歴史は、翻訳されたポール・ギショネの著書のなかで詳しく書かれている¹ので、ここでは、そのなかではあまり触れられていない革命期・ナポレオン時代のサヴォワとジュネーヴの関係を中心に、ギショネと並ぶサヴォワ史研究の大家であるアンドレ・パリュエル＝ギヤール（André Palluel-Guillard）の研究を中心に論じることにした。

自然の障壁によって遮られていないサヴォワ＝ジュネーヴ間の国境を決めた要因は三つほどある。一つは宗教的要因、プロテスタントの首都であるジュネーヴと、カトリック改革のサヴォワの対立である。第二は、都市と農村の対立である。第三は、国際関係である。フランス、オーストリア（神聖ローマ帝国）のみならず、スイス連邦がからみ、16世紀後半以降になると、サヴォワの首都がピエモンテのトリノに移るため、トリノの宮廷の思惑も加わる。ジュネーヴは国際的名声、人的ネットワークでサヴォワに比べはるかに有利な立場にあった。人的ネットワークでは、プロテスタントのネットワークが重要であるが、各地に散らばったジュネーヴ出身者が宗派を越えて織りなしているネットワークも存在した。これらに、フランス革命期以降、人民投票や署名活動などによって表明される住民の意思も重要な要因として付け加わることになる。現在も続くサヴォワの内部も忘れてはならない。北サヴォワと南サヴォワの対立、アヌシー（Annecy）とシャンベリ（Chambéry）の対立に加え、北サヴォワ内部

でも、ジュネーヴの経済圏であるシャブレ（Chablais）地方と、ジュネーヴとは交通の便が悪いアナシーは対立していた²。

1. フランス革命までのサヴォワとジュネーヴ

宗教改革によってサヴォワとジュネーヴは分離し、敵対状態になる。カトリック改革の拠点となったサヴォワから軍勢が送られ、何度かプロテスタントの首都を包囲した。それでも和解に向けた動きが始まり、1603年のサン=ジュリアン（Saint-Julien）条約によってジュネーヴ商品はサヴォワ国境での通関税を免除されることになった。続いて1754年6月のトリノ条約で、カルロ=エマニュエーレ3世（Carlo-Emmanuel III）は完全にジュネーヴの国境を認めた。事業で富裕化したジュネーヴのブルジョワはサヴォワ領の土地を購入し、その所有地は次第に増大していった。カトリックの労働者とプロテスタントの雇用者の共存が広がり、サヴォワの貴族はジュネーヴのサロン、プティックに出入りし、医者にかかるようになった。一方、ジュネーヴのブルジョワジーはエヴィアン（Evian）の温泉やシャムニ（Chamouny）の水河にまで出かけるようになる。サヴォワ人はジュネーヴで資本主義と西欧文明の手ほどきを受け、ジュネーヴ人はサヴォワの自然に惹かれるようになったのである³。

千葉治男氏の『義賊マンドラン』にも書かれているが、1775年5月にフランス当局が兵団を組織しサヴォワとの国境を越えて、武装密輸団の根城を襲い、頭領マンドランを逮捕し、ドフィネのヴァランスに護送した⁴。事前許可がなかったので、トリノの宮廷もさすがにこれには一応抗議している。この事件を考える時は、トリノの政府がサヴォワ人が個々に行う密輸を黙認していたこととそもそも国境防衛が困難であった事を考慮しなければならない。サヴォワはフランスとの国境、とくにグルノーブル方面の国境防衛に問題を抱えており、フランスによる占領が16世紀から18世紀初頭にかけて計5回、期間も43年間にわたっている⁵。他方、ジュネーヴは17世紀初めにはフランスに対する従属関係が明確になり、18世紀にはさらに従属は深まっていった。投機、投資、知的交流の他、ジュネーヴで革命騒ぎが起こるたびごとに、ジュネーヴ支配層はフランスに調停を頼んだ。例えば、1782年の政治危機に際して、保守派はためらわずフランスに直接的軍事介入を求めている⁶。

2. フランス革命・ナポレオン期のサヴォワとジュネーヴ

サヴォワとジュネーヴの共生関係が発展していき、サヴォワとトリノの距離が広がり、ジュネーヴがフランスへの従属を深める中で、フランス革命が始まる。1792年9月モンテスキュー将軍がサヴォワに侵入し、これまでと同じように、簡単にサヴォワ

は征服された。サヴォワの住民は代表を選び、10月にアロブロージュ議会在開催され、フランスへの併合支持を議決した。これを受けて、フランス側も、サヴォワ併合を1792年11月に決め、こうしてモン＝ブラン県（Mont-Blanc）が誕生した。他方、ジュネーヴ併合は1798年5月に行われた。不在であっても亡命者とはみなされず、不在の市民を含めてジュネーヴの全市民がフランス市民とされたが、これは当時としては異例の扱いであった。その他の併合条件も比較的配慮されたものであり、同じような配慮を受けられなかったサヴォワの人々はこれを忌々しく思っていたようである⁷。

3世紀以上ぶりに、ジュネーヴとサヴォワは同じ国家のなかに統合されることになったが、すぐにこの地域の行政区分の再編が問題になる。再編には、モン＝ブラン県あるいはラン（l'Ain）県に統合、独立の県にするという三つの選択肢があった。ただし、独立の県にするにはジュネーヴ市は小さすぎ、できるだけ均等に分割するという革命の原則に合わせるためには、他県の一部を編入させる必要があった。ちょうどその時、北サヴォワの広範囲な地域からジュネーヴへの統合支持の請願運動が起こり、これが功を奏して、1798年8月27日に北サヴォワの一部を取り込んで新しくレマン（Léman）県を創設する法律が成立した⁸。

ナポレオン時代に入った1800年2月の再編で、レマン県は拡大し、モン＝ブランを帰属させるとともに、ジェックス（Gex）地方も統合することになった。ジュネーヴはプロテスタントの首都、交易センターとしての国際的な名声を保持し、高位要職にあるジュネーヴ出身者をあてにでき、独自の病院、コレージュ、ジュネーヴ人だけに適用される奨学金をもつなど、フランス帝国のなかにあっても一定の恩恵を受けることができた。外からの訪問者によって自然の風景が賛美されるようになるが、政治的には無力化したサヴォワが羨むのも無理がなかった。

ナポレオン時代は、モン＝スニ（Mont-Cenis）峠の道路の整備などインフラの整備が大きく進んだ時代である。後に大陸封鎖による経済的な困難が生じるが、初期においては期待感が広がり、アミアンの講和は新しい時代の夜明けのように思われていた。サヴォワとジュネーヴへの徴兵の負担も全国平均程度であり、他県に比べて重かったわけではない。帝政への反対は少なく、フランスと両地域との結びつきは次第に強化され、地方名望家層の体制への加担も増えていった。たしかに1811年以降の経済危機とその後の破局によって失望感は急速に広がっていくが、パリュエル＝ギヤールは、それまでの時期を捨象して論じるのは公平ではなく、フランスへの統合には十分な時間が足らなかったのだと論じている⁹。

3. ウィーン会議

1814年、ナポレオンの敗退によって独立を回復したジュネーヴ政府は、スイス連邦への加入と領土の拡大を検討した。この案には、サルデーニャ王ヴィットーリオ＝エマヌエーレ1世（Vittorio-Emmanuele I）の偏狭な保守主義を嫌うサヴォワのブルジョワが支持したが、カトリックが大量に流入してくるのを恐れるジュネーヴのプロテスタントと、プロテスタントの支配のもとに入る気はないサヴォワのカトリック貴族、聖職者の双方が難色を示した。他方、タレーランはジュネーヴがジェックス方面に拡大することに反対し、サルデーニャも領土を割譲する気はなかった。サルデーニャ王は領土をリヨン、グルノーブル、マルセイユにまで拡大することを夢見ていた。スイスはといえば、ジュネーヴの連邦加入に同意していたが、新しいカントンの強大化には賛成しなかった。イギリスも全権代理ウェリントンはジュネーヴの要求に好意的であったが、外務大臣カースルレイはジュネーヴの要求には冷淡であった¹⁰。

1814年5月、第一次パリ条約が結ばれ、最初の国境変更が行われ、サヴォワはフランス領とサルデーニャ領に東西に分断された。しかも交通路も地域経済も考慮されない恣意的な分け方であった。フランス領に残った部分で小さな県が作り直され、モン＝ブランがサルデーニャ領に編入されたにもかかわらず、モン＝ブラン県と呼ばれることになった。ジュネーヴも領土拡大がうまくいかず不満であったが、9月に始まるウィーン会議では、国際的名声と人的ネットワークを利用して、サヴォワに比べはるかにうまく立ち回ることができた。ジュネーヴはスイス連邦加入の道を選ぶが、それは、国際情勢のなかで選択肢がなかったのが主な理由であるが、ジュネーヴ固有の諸制度を保持するために、冷徹な計算に基づいたものでもあった¹¹。

モン＝ブラン県で、サルデーニャ王のもとにサヴォワの一体性を取り戻そうとするサヴォワ王党派のキャンペーンが始まる。1815年7月に展開された署名運動は、一ヶ月で農村部を中心に27,000人近い署名を集めた。これはモン＝ブラン県の成年男子の2/3近く、家長の4/5を占めていた。こうした世論の運動を前にして、百日天下に加担し、形勢が悪かったフランス派はなすすべがなかった。第二王政復古のフランス政府がサヴォワにあまり関心がなかったのも幸いした。1815年11月20日の第二次パリ条約で、サヴォワ全体がピエモンテ領に編入されることになった。サヴォワの分割は不可能であることが示されたのである。だがトリノの王権に対するサヴォワの人々の態度は微妙であった。サヴォワ王党派の中心的人物、ジョゼフ・ド・メーストル（Joseph de Maistre）にさえ、トリノに対してある種の冷めた感情が認められる。ジュネーヴは第二次パリ条約で、フランスからジェックス地方の8つのコミューン（communes）を獲得し、スイス連邦と地続きになった。さらに、トリノとの交渉（1816年1月17日ー

3月16日)で、カルージュ(Carouge)などを住民の意思を問うことなく併合した。さらにその背後に190キロ四方におよぶ自由貿易地帯が設定されることになったのである¹²。

おわりに

フランス革命・ナポレオン時代を経て、国境の決定にあたっては住民の意思を無視できないようになった。経済的には貧しかった地方で、こうした近代的な政治観念が保守的な名望家層にも広がっていたことは注目しておいてよいだろう。この経験は、1860年の併合の時にも活かされることになる。ジュネーヴでも中小ブルジョワジーが台頭し、かつての大ブルジョワジーによる寡頭支配は不可能になっていた。フランス革命の痕跡は消すことができなかつたのである。

サヴォワとジュネーヴが同じ国家の中で共存した革命・ナポレオン時代をどのように評価するのは、現在でも政治と絡んだ生々しい問題である。ヨーロッパ統合のなかでサヴォワとジュネーヴの関係もまた揺れており、北サヴォワの一部にはフランスから分離してスイスへの統合を主張する議論さえある。しかし、革命・ナポレオン時代にフランスへの統合が確実に進んでいたことや、ジュネーヴとサヴォワの利害の違いや国際舞台での影響力の格差も見落とすわけにはいかない。歴史解釈にとって大事なのは、都合のよい時期や材料を選びだすのではなく、歴史の全体を理解することであろう。

<註>

- 1 Paul Guichonnet, *La Savoie du Nord et la Suisse. Neutralization. Zones franches, L'Histoire en Savoie*, No 2, nouvelle série, 2001 (邦訳 内田日出海・尾崎麻弥子訳『フランス・スイス国境の政治経済史 一越境、中立、フリー・ゾーン』昭和堂、2005年)。
- 2 Palluel-Guillard, «Petite histoire de la frontière entre Genève et la Savoie», *Frontières de Savoie, L'Histoire en Savoie*, 19 année numéro spécial, septembre 1984, p.25; id., *L'Aigle et la croix: Genève et la Savoie 1798-1815*, Saint-Gingolf, 1999, pp.21, 25.
- 3 Palluel-Guillard, «Petite histoire», pp.29-32.
- 4 千葉治男『義賊マンドランー伝説と近世フランスー』平凡社、1987年、12頁。
- 5 Bernard Gasperrin, *La Savoie et la France de la Renaissance à la Révolution, L'Histoire en Savoie*, 27 année no 50, décembre 1992, p.23.
- 6 Roger Devos et Bernard Gasperrin, *La Savoie de la Réforme à la Révolution française*, Rennes, 1985, pp.532-533; Palluel-Guillard, *L'Aigle et la croix*, p.578.

- 7 Palluel-Guillard, *L'Aigle et la croix*, p.53. 拙稿「十九世紀サヴォワにおける歴史とアイデンティティ」服部春彦・谷川稔編『フランス史からの問い』山川出版社、2000年を参照。
- 8 Palluel-Guillard, *L'Aigle et la croix*, pp.52-59.
- 9 *Ibid.*, pp.303-312, 345-354.; Palluel-Guillard, Christian Sorel, Guido Ratti, Antoine Fleury, Jean Loup, *La Savoie de la Révolution à nos jours; XIXe siècle*, Ouest France, Rennes, 1986, p.23.
- 10 Palluel-Guillard, «Petite histoire», p.33.
- 11 Palluel-Guillard, *L'Aigle et la croix*, pp.495-528, 581.
- 12 *Ibid.*, pp.552-555, 578; Guichonnet (sous la dir. de), *Haute-Savoie, une terre, des hommes*, Les Marches, 1990, p.17.